

①事業の基礎情報

事業名	異校種間連携推進事業				担当部・グループ名	教育委員会 教育センターグループ					
実施期間	平成 26 年度～平成 29 年度				担当 GL 氏名	内藤 克己					
新規・継続の別	新規事業				電話番号(内線)	52-1111(内線 350)					
縦(計画(基本計画)体系)	個別目標	(4)学校・家庭・地域が連携を深め、 12年間の学びや育ちをつなげます				予算・事業上の 予算書上の 事業名	款	10 款 教育費			
	こんなことに取り組みます	幼稚園・保育園、小学校、中学校の垣根を越えて、教職員同士が現場をふまえた情報交換を密にするとともに、子どもたちの交流を行うなど、発達段階に応じた教育を実践します。					項	1 項 教育総務費			
							目	1 目 教育委員会費			
	みんなで目指すまちづくり 指標名	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校が好きと感じている子どもの割合</li> <li>・学習に積極的に取り組む子どもの割合</li> </ul>					事業名	1 教育委員会運営事業			
	現状値(H25)	・82 ・69	実績値(H26)	・88 ・77	実績値(H27)		実績値(H28)		目標値(H29)	・85 ・75	(単位) %

②事業の概要

目的 (何をどうするために)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちが「確かな学力」と「発達段階に応じた資質・能力」を身につけるため。</li> <li>・子どもたちが小学校や中学校の入学時に抱えている、不安やとまどいを軽減するため。</li> <li>・全ての幼・保、小、中教職員が、子ども一人ひとりに対して「12年間の学びと育ちを切れ目なくつなげる」という意識を持ち、個々の子どもの側に立ち、発達段階に応じた教育を行うため。</li> </ul>		
対象(誰・何を対象に)	幼稚園児、保育園児、小学生、中学生 幼稚園・保育園・小学校・中学校の全教職員	対象の数量	11園、7校
最終目標 (最終的に何がどうなれば達成か)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全ての幼・保、小、中職員が連携を密にし、異校種それぞれの教育観や指導法の共通点・相違点を情報交換等によって把握しながら、子ども一人ひとりに対して「12年間の学びや育ちをつなげて育てていく」という意識を持って、学年や年齢に応じた教育を実践している。</li> <li>・子どもたちが「確かな学力」と「発達段階に応じた資質・能力」を身につけて成長している。</li> <li>・子どもたちの小・中学校入学時における不安やとまどいが解消・軽減している。</li> </ul>		

③事業にかかる事業費概要

平成 26 年度 (当初)			決算	主な内容
事業費総額 (千円)		—	130	異校種間連携推進委員会の指導講師への謝礼 1回3万円×年間5回開催 (アクションプラン No.18、No.19、No.20の 事業内容の指導を受けた。)
財源内訳	一般財源	—	130	
	特定財源	国・県支出金	—	
その他		—	—	
補助事業・単独事業の別		単独事業	単独事業	



異校種間連携事業 (小6-中1)

#### ④平成 26 年度の実施内容（目指す姿の実現に向けて、どんなことに取り組んできたのかを整理する）

	何を・どうした ※箇条書きで記載する	いつ(年月)	アウトプット
実施内容	①異校種参観を実施した。(年長・小1・小6・中1担任)	H26.4～	54人実施
	②異校種間連携事業を実施した。(幼保小連携、小中連携)	H26.4～	88事業実施
	③異校種間連携推進委員会を開催し、各校連携の状況報告を行った。(年5回)	H26.5～	5回開催
	④「中1ギャップ」に関する実態調査を行い、分析結果を報告した。	H26.6 H27.1	2回実施
	⑤第5回異校種間連携推進委員会で、今年度の振り返りと次年度に向けての課題を出した。	H27.1	
進捗状況	当初に掲げた計画どおり、順調に進めることができた。		
実施内容に対する成果 (事業の自己評価)	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 実動した教職員から「授業や各種行事と関係づけて実践しているので子どものやる気を引き出すきっかけになっている。意義や意図を理解した活動が行われてきたので目の前の子どもに生かしていける」との声が各園各校で聞こえるようになってきた。</li> <li>☆ 各園各校が「子どもの学びや育ちをつなげること」の意義を感じたことで、異校種間連携事業の質も向上してきている。</li> <li>☆ 子どもたちに「学校を好き」と感じさせる「確かな授業づくり」と「魅力ある学校づくり」の観点においても、「異校種参観事業」による「小1プロブレム」「中1ギャップ」の軽減、自己肯定感を感じられるような「園児・児童・生徒交流」の推進が効果を高めている。</li> </ul>		

#### ⑤課題と今後の取組みの方向性（平成 26 年度を振り返り、課題を抽出し、今後の取組みの考え方を整理する）

課題	今後の取組みの方向性
<b>（1）事業の精選</b> ・指導計画は、目の前の子どもの実態に応じて作成すべきものである。実績成果に重きをおいた形だけの事業になってはいけない。また、教職員の負担が増える一方では質の高い教育は期待できない。	・実践を継続していく中で本当に子どもの未来のために必要なものかどうか、年度当初や年末に関係者が集まり、継続していく価値のある事業であるかどうかをきちんと総括していく。
<b>（2）実働意識の拡大</b> ・「12年間の学びや育ちをつなげる」ためには、異校種間に直接かかわる学年だけでなく、小学校でいえば、2年生から5年生までのつなぎ、中学校でいえば、2年生3年生を担当する教職員も意識していくことが大切である。	・異校種間連携に直接かかわる学年担当者だけでなく、現職研修や職員会等の際に、「12年間の学びや育ちをつなげる」ということを前面に出し、異校種のつなぎに直接かかわる学年だけでなく、校内における異学年間の縦の連携を意識させていく。

#### ⑥課題解決に向けた平成 27 年度の具体的なアクション（案）

	何を・どうする ※箇条書きで記載する	いつまでに(年月)
計画(案)	①「中1ギャップ」に関する実態調査を行い、分析結果を報告する。	H27.6・ H28.1
	②異校種参観を実施する。(年長・小1・小6・中1担任)	H28.3
	③異校種間連携事業を実施する。(幼保小連携、小中連携)	H28.3
	④異校種間連携推進委員会を開催し、各校連携の状況報告を行う。	H28.3
	⑤異校種間連携推進委員会を定期的に開催し、「教育基本構想」の目標に向けてそれぞれの事業が進んでいるか進捗管理する。	H28.3

特記事項	
------	--